

神祇大副吉田兼見（1535～1601）の日記
長らく品切であった第1・第2は全面改訂して復刊！

【史料纂集古記録編 第171・172・173・178・183回配本】

かね み きょう き
兼見卿記 第1～5

A5判・上製・函入・定価各冊（本体13,000円＋税）

第1 新訂増補版 斎木一馬・染谷光廣校訂／金子拓・遠藤珠紀新訂増補版校訂

元亀元年（1570）～天正9年（1581） 276頁 ISBN978-4-8406-5171-4 C3321

●兼和は元亀元年に父兼右から家督を継承する。兼見は天正七年正親町天皇皇子誠仁親王の二条御所の昇殿を聴された。また織田信長の勢力拡大の動き、明智光秀・村井貞勝らとの交流による、信長とその周辺の情報、朝廷との関係が細かく記載されている。信長の権大納言・右大将任官、正親町天皇讓位問題など、信長と朝廷の関係を知る上で基本となる記事を取める。

第2 新訂増補版 斎木一馬・染谷光廣校訂／金子拓・遠藤珠紀新訂増補版校訂

天正10年（1582）～同12年（1584） 266頁 ISBN978-4-8406-5172-1 C3321

●天正十年本能寺の変が勃発するが、兼見卿記は、この年別本・正本二種の日記が現存している。二本の存在は、朝廷黒幕説の有力根拠としてあげられた。さらに信長没後、羽柴秀吉と柴田勝家との対立と勝家の滅亡、秀吉と織田信雄・徳川家康との対立と和睦など、関白になる直前までの秀吉が覇権を握る過程が記されている。

第3 橋本政宣・金子拓・渡邊江美子・遠藤珠紀校訂

天正13年（1585）～同15年（1587） 310頁 ISBN978-4-8406-5173-8 C3321

●豊臣秀吉の紀州雑賀攻め、四国平定、徳川家康との和議、越中の佐々成政攻め、九州平定など全国統一の過程が窺える。天正十三年末の大地震では、近江・伊勢の死者がおびただしく、丹後・若狭・越前の沿岸部では大津波により多数の死者が出たという。その他「北野社の大茶会」や、黄金の茶室と茶道具に関する記事も見られる。

第4 橋本政宣・金子拓・堀新・遠藤珠紀校訂

天正18年（1590）～同20年（1592） 266頁 ISBN978-4-8406-5178-3 C3321

●豊臣秀吉による小田原北条氏攻め・奥羽仕置を経て朝鮮出兵に至る政治情勢、また、聚楽第の整備、東山大仏の建立をはじめとした京都の大規模な都市改造が行われる。また愛息鶴松の夭折、生母大政所や弟秀長の死去など肉親との死別から、甥秀次への関白職譲与に至る豊臣政権内部の動向も詳しい。兼見に対しては後陽成天皇と生母勸修寺晴子からの信頼がますます深まっている。

第5 橋本政宣・岸本眞実・金子拓・遠藤珠紀校訂

文禄2年（1593）～文禄4年（1595） 304頁 ISBN978-4-8406-5183-7 C3321

●本冊も豊臣政権の動向に関する記事を多く取める。秀吉の諸大名第への御成、東山大仏建立などが記されている。中でも豊臣秀次との関係は近く、秀次の施政や文化事業についての記事、家族に関する記事も豊富である。このため、文禄四年七月に発生した、「秀次事件」について、その発覚から一連の経緯、この騒動にともなう洛中の混乱などの記事にも詳しく、事件を知る上で不可欠である。また文禄二年正月、兼見は嫡男兼治に家督を譲った。

織豊期の最重要史料、初の全文翻刻！

【史料纂集古記録編 第190回配本】

か ね み き よ う き

兼見卿記 全7冊

橋本政宣・岸本眞実・金子拓・遠藤珠紀 校訂

2017年5月25日刊行！

第6 文禄5年〔慶長元年〕(1596)・慶長2年(1597)・同7年(1602)・同8年(1603)・慶長13年(1608)

A5判・上製・函入・272頁 定価(本体13,000円+税) ISBN978-4-8406-5190-5 C3321

- 第6巻概要 本冊は前冊に引きつづき、文禄五年(慶長元年)・慶長二年、および同七年・八年・十三年分の天理大学附属天理図書館所蔵自筆原本五冊を取めた。翻刻の体裁も原本の雰囲気が見えるよう工夫し、口絵写真も示した。
- 豊国社関係の記事 後半慶長七年記以降の記事の中心となるのは、秀吉を祀る豊国社関係の記事である。弟梵舜が神宮寺社僧となり、孫萩原兼従(慶鶴丸)が兼見の養子として社務職に補された。吉田と豊国社を往復する兼見の行動が記録され、秀頼・同生母浅井氏(淀殿)・北政所(高台院)・八条宮智仁親王・木下浄英(家定)ら秀吉の係累、片桐且元や小出秀政・大野治長ら家臣、福島正則・黒田長政らいわゆる「豊臣恩顧」大名たちの豊国社参詣や、彼らとの音物のやりとりの様子が頻りに記される。豊国社については、梵舜の日記『舜旧記』全8冊(史料纂集古記録編：完結)と併読することにより、秀吉没後の豊臣家周辺の動きが明らかになる。
- 慶長伏見地震 本冊の期間における大きな出来事としては、秀吉の(指月)伏見城を倒壊させた文禄五年閏七月発生(慶長)伏見地震がある。この地震の発生や被害状況を伝える史料は多いが、本冊に取められた記事もまた、とくに京都の被害や、被災した禁裏の様子、朝廷としての対応を知るうえで貴重である。これをきっかけに年号が文禄から慶長へと改元されるが、兼見は改元仗議の聴聞を許され、その様子を記録している。
- 後陽成天皇の信頼 兼見に対する後陽成天皇とその生母勸修寺晴子(新上東門院)の信頼は相変わらず厚く、伏見地震の際の祈禱を始め、晴子に依頼された神事を毎月修するほか、事あるごとに禁裏の祈禱に携わり、三社託宣の宸筆名号を賜るなど、吉田神道の継承者として朝廷の神事に重きをなした。このため慶長二年二月に兼見は従二位に加級され、兼治は左兵衛佐に補任されている。
- 家督の継承と日記の欠落部分 文禄二年に家督を息兼治に譲り、大坂・伏見とのやりとりはもっぱら兼治があたっていたためか、政治向きの情報はこれまでに比べて必ずしも多くないが、文禄五年五月の拾参内・昇殿、および徳川家康の任内大臣、また慶長八年八月の徳川秀忠女千姫と秀頼の祝言など、豊臣氏・徳川氏の動向がうかがえる。この間に生じた政治的勢力図を大きく塗り替えることになる慶長三年八月の秀吉薨去、同五年九月の関ヶ原の戦いについては、前後の年次に欠落があって記事がない。この間兼見自身が大病を患い、その後も病気がちな様子が日記からわかるが、『舜旧記』には兼見が神事を勤めている様子も記されており、記事欠落の理由は不明である。
- 兼見の私生活 父兼右二十五年忌を営み、伯父牧庵等貴の事故死(賀茂競馬の見物に赴き増水した鴨川を渡ろうとして溺死)に慨嘆したり、孫幸鶴丸(のち兼英)の色直しに立会い、孫女辰の近江長束助信(正家甥)への輿入れに際し、姉満の時ほどの準備ができないことを残念がり、その満が阿野実顕との間に儲けた嫡男(兼見の曾孫)薫(公福)が元服するなど、豊富な記事がある。そのなかで兼治との不仲をうかがわせる記事も散見され、祈念料の分配や兼治の借金をめぐる経済的な問題がその原因となっていたことが推し量られる。
- 交遊関係 長岡幽斎が吉田山内に随神庵を営んで滞在することが多かったため、幽斎を媒介とした文化的交流が垣間見られ、本冊では本因坊算砂ら碁打との交流が目立つものとして挙げられる。

【裏面に第1～5の解説あり】

八木書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8

Tel:03-3291-2961 / Fax:03-3291-6300 pub@books-yagi.co.jp <https://catalogue.books-yagi.co.jp/>